

# 「金色夜叉」の一素材——宮のモデル——

土佐 亨

『金色夜叉』のお宮、あれほど通俗を動かす女主人公のモデルには、誰がなつたことであらう。又あの貫一のモデルには誰がなつたことであらう。私はN氏やO氏を通じて、その間の二三の消息をきいたが、しかし今更それを此処に披瀝する必要もない。

田山花袋は、文壇回想録『東京の三十年』（大6）に、右のような言葉をはさんでいる。「金色夜叉」の作中人物のモデルについては、当時からかく取沙汰され、それはもはや改めて花袋が述べるまでもないくらいに周知のことからになっていたようである。そして巖谷小波が、『金色夜叉の真相』（昭2）で、噂のもとである自分の恋愛事件の全貌を告白し、噂を固定し公然化したことは有名である。貫一を小波自身に見立て、宮のモデルには、匿名ながら、漢学者川田壘江の三女綾子や、紅葉館の女中であつた中村須磨子が擬せられているわけであるが、やはり「金色夜叉」の人物造型と、まったく無縁のものではなかったと

思われる。しかし、事件的な類似が部分的には認められるものの、人間像の点ではかなりののへだたりがあり、「貫一の場合と同様、宮の性格その他は、あくまで紅葉の創作とみるべきであろう」というのが妥当な解釈なのである。

だが、一方で江見水蔭は、『硯友社と紅葉』（昭2）で次のように述べている。

世間では小波を貫一と云つてゐるが、全部然うではなく、紅葉自身も出てゐるし、又中村雪後なども取入れられてゐる。お宮でも一人をモデルにはしてなく、集合モデルだ。複写式モデルだ。

水蔭は、『自己中心明治文壇史』（昭2）でも、「其時代の作家は、多く集合写真的に幾人かを寄せて一人物を捏つち上げたの」だと、傍点をつけてまでそのことを繰り返している。

皆集合モデルで、決して一人の直写ではない事を、自分は能く知つてゐるが、それを分析して今日発表するには、未だ早い

で省く。

と結んでいる。

水蔭は、部分的にしる、「金色夜叉」のモデルになった多くの実在人物知っていたようで、モデル探しには、幾分期待を抱かせられもするが、ここでモデルを問題にするのは、「集合写真的」ということが、紅葉はじめ「其時代の作家」の小説の方法に関連するからであり、『硯友社と紅葉』によれば、

此時代では、一人物をモデルとし、一事件を直写する事を、作家の耻辱のやうにもして『誰某は自分の事を其儘書いた。』とか、『友人の事をソックリ書いた。』と云って、直写するのを嘲笑したものだ。

とあって、自然主義文学の虚構性の乏しさを難じて、硯友社文学の性格を説こうとする文学史的な課題が見られるからである。

ところで、この「集合写真的」と水蔭のいう「金色夜叉」の人物造型の方法は、どのようなものであろうか。それを明らかにするためには、お宮ならお宮に関して、モデルをできるだけ多く集め、それを客観的に定着し、作中人物の部分や全体にわたって比較検討することが必要であろう。そして小波に関する方面のみは、今日彼の日記が一部公刊され、また彼の日記のすべてはフィルムに撮られて明治大学に所蔵<sup>(3)</sup>されており、『金色夜叉の真相』をも合わせ

て再考の余地も無いわけではない。しかしその他のモデルについては、水蔭もほとんど語ってはおらず、モデル探しも今となつては至極困難となっている。しかも、モデルは、何も直接間接に紅葉と交渉のあった人物とは限らず、他の文学作品の人物である場合もあり、すでに、バーサ・クレーの小説や「嵐が丘」の人物などが、構想とともに持ちこまれているらしいことが考えられており、貫一の造型にはハムレットさえ顔を出している<sup>(5)</sup>のである。

ところで、紅葉が、ヒロイン宮の造型に際してまさしく採り入れた一つのモデル（というよりは素材）のあったことを報告しておきたい。

宮は、少女時代からすでに自らの美貌を自覚して、その「色をもて富貴を得べし」と信じており、この性向が悲劇の素因となつたのであるが、彼女の夢みる乙女心を強く刺激し、容色を決定的に自負するに至つた一つの事件があった。

それは彼が十七の歳に起りし事なり。当時彼は明治音楽院に通ひたりしに、ヴィオリンのプロフェツサアなる独逸人は彼の愛らしき袂に艶書を投入れぬ。是素より仇なる恋にはあらで、女<sup>を</sup>夫の契を望みしなり。殆ど同時に、院長の某<sup>なにがし</sup>は年四十を踰<sup>こ</sup>えたるに、先年其妻を喪ひしをもて再び彼を娶らんとて、密に一室

に招きて切なる心を打明かせし事あり。／此時彼の小き胸は破れんとするばかり轟けり。半は曾て覚えざる可羞の為に、半は遽に大なる希望の宿りたるが為に。彼は茲に始めて己の美しさの寡くとも奏任以上の地位ある名流を其夫に直ひすべきを信じたるなり。彼を美しく見たるは彼の教師と院長とのみならず、隣を隣れる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらず。

(前編・第三章)

ところが、この宮の遭遇した事件とほとんど同じ事件が、東京音楽学校(東京芸術大学音楽学部的前身)で起つたらしいことを、『読売新聞』が採り上げているのである。

「金色夜叉」の四年半以前、明治二十五年八月十二日から、雑報に「風説鬼一口」と見出しをつけて、一連の記事が掲載された。長文であるが、資料として全文を紹介する。(原文は総ルビで句読点はないが、特殊な訓みかたのルビは残し、句読点も若干施し、一部当用漢字の字体に改めた以外は、原文どおり)

○風説鬼一口 春は花の雲、鐘一つ売れぬ日も無き都の片隅に、名所は秋も面白き松風の琴の音優に、やさしき女のすなる技を教ふる館あり。館長は下品なる容貌に似ず、社会の名流に数へらるゝ紳士にて、諸所の演説に其道の熱心家と聞こえ、頭顱も少禿の分別盛、色づきたる大勢の女子を預かるには然るべき人物と世の信用疎ならず、女流の名手此門より出づるもの

踵を接ぎて、斯道の末繁昌頼もしく想はれけり。されども女生の風儀正しからぬ噂の無きにはあらねど、千里見通しの通力あるにもあらぬ凡夫の館長なれば、蔭にて生徒同士が男の品評するまで知るべきやうはなく、兎も角も館の規律厳に間違ひなどの起らぬを、養ひ難き女子輩をよくも取締りたるもの哉と世評は好かりしが、此館に随一の美人と聞こえて、近所なる学校の書生ども、水浅黄の「べちこおと」を見識り、山石といふ姓を聞き覚え、館の飯途を木蔭に待伏せして柳腰花顔を餘所ながら拝むを楽みにするほどの女子ありけるが、却説館の僱教師にて生国は独乙の色男、夫ある女でも惚れたらばぜひとりひといふ毛唐、数月前に最愛の妻を喪ひ涕泣の涙歇みがたなく、起きて見つ寝て見つ寝台に友無き夕を寂しがり、後妻といふほどの意も無けれど、一時の気晴しにもなるべき娘をと、教場に出席簿を読みながら一々島田束髪に心ありげな碧い色眼を、館長は早くも察して、其受持の級に色好き女性を窃に招きて注意しなければ、いづれも用心堅固に身を持ちて、ぜひとりひも施す術無さに霎時は手を束ねて機を見合せけり。然るに思ひきや、始めから彼をと目星をつけたる山石が、どうやら浮草の根を絶えて誘ふ水あらば、唯といふべき風情なるに、天の与ふる所と喜悦の涎頸飾を硬らせ、旨い首尾を松の木蔭に薔薇花咲く遊歩場の草茵に独り楽譜読む山石の姿を、見るより忍びより話しかけ、後園の木間に連れゆきて親密なる朋友のすなる礼を行ひしを、知るもの絶えてあらざりけり。(以下次号)

〔読売新聞〕雑報 明25・8・12

記事は、翌日にまで持ち越されている。

○風説鬼一口（つゞき） 元来情に脆き欧羅巴人の常なれば、胸の思ひを裏みかねて穂に露はるゝ花薄、招く浮名も厭はでや、人目も羞ぢず山石を逐ひまはせば、女は憂きことに思ひの外、此方も靡き寄添ひて、休憩時間には必らず散歩に手を組みて睦み語らふ有様は、女夫離れぬ蝶々の花間に戯る如くなり。

こは只事ならずと館長は大いに驚きて、先山石から意見を加へんと思ふ間に、早出来たり或ひは証拠を見たりなど忌はしき風説高くなりければ、流石に捨置き難く実否を正して見れば、噂に違はぬ廉あるより、早速山石に退校を命じければ、此始末いか世間に知れて嫁入前の大事の身に疵つき、此地の住居も憂くや遠き浪華に身を忍びて、埋木に花咲くもよしなしや。女生一同は、此館の名物を失ひたるを惜むにつけ、不義の相手の「ぜひとりひ」は何の咎めも無くて勤め続けるこそ奇怪なれ、教師なりとて用捨はせじ、山石と同罪の処置あらざれば我等が此分にては済まさじと、総代を以て館長に迫りけるに、如何なる都合のありてや、何事も我胸にあればと擲み処の無き挨拶に一時遁れ。其後何等の沙汰も無くぐづぐづにして仕舞ひけれど、長いものには巻かれるの諺、今は生徒も力及ばず泣寝入になりたるが、其より館長の信用次第に堕ちて、不義の教師の罪を糺さぬ所を見れば、四角な言ばかりいうて苦い顔はしてゐても後暗き事のあるにはあらざるかと、一同目を側めけるが、館に松風といふ雑種の女子ありて彼山石に次ぐ美人なるを、館長は、一日用あ

りとして課業の畢るを待ちて人無き評議室に呼入れ、中より戸を鎖して凡そ二時間ばかりも談ぜしが、親友なる某は、扣所にて帰るを待てども来らざるより、いかゞしたると其室に忍び行きしが中の様子は知れ難く、やうく釈されて出来るを見れば顔色常ならず、加之愛らしき眼に涙を浮べたるは何をか呵られけると訊ぬれば、此事忘れても他人に語りたまふなと聞けば、嘘のやうな館長の不心得、今は知らざる人も無。（完）

（「読売新聞」雑報 明25・8・13）

風説とあるように、巷の噂に尾びれをつけて筆面白く書きたてたらしい三面記事で、館長の名は伏せているが、当時の新聞ではざらに見かけるスタイルである。ところでこの記事は、個人の名誉に関することとてやはり問題になったとみえ、しばらくすると、今度は事実に近い報として、登場人物の名を明確にし、いささか陳謝の意をこめて再び採り上げられた。

○「風説鬼一口」の記事に就て 去る十二十三両日の紙上に連載したる「風説鬼一口」と題する一項に付ては、東京音楽学校に於て迷惑を受くること一方ならず、校長村岡範為氏（はんいち）の如きは頗る苦心し居らるゝ由なるが、今彼事件に付て確報なりといふを聞き得たれば左に詳記すべし。全く彼の一項の事実は、東京音楽学校に起りたるに相違なけれども、現校長村岡氏の任職中に在りたる事にはあらず。昨年十月以前々校長在職の

時、同校教師独逸人ヂットリヒ氏は、同校卒業生岩原愛子と結婚したき旨を同子の親籍瓜生氏へ申入しに、瓜生氏に於ては、此の事他事とは違へば即答なり難し、何れ親族一同に相談したる上挨拶すべしと断はり置きしに、同年秋頃なりとか、ヂットリヒ氏は上野公園に於て端なく岩原子に邂逅せし節、直接に同子に結婚の事を談ぜしことありしより、忽ち世上に伝播して種々の流言とはなりしなりとか。以上は則ち彼の雑報の依つて起りし原因にして、其後前校長去り、今の村岡氏代つて校柄を執り、一層校内の取締を厳肅にせしかば、職員生徒皆な廉潔を守て些の醜声もなかりしが、一日ヂットリヒ氏は村岡氏に請ふに、今より一年如しくは一年半後に於て岩原子と結婚したければ此事を瓜生氏へ熟談ありたき旨を以てせしかば、村岡氏は答へて、斯る事西洋の風俗には珍らしき事にはあらねど、我國に於ては、教員と卒業生徒と結婚する如きは教育上不良の影響なきを保せず、依つて折角の事ながら其の儀は思ひ止まるべし、且僕の在職中は生徒或は卒業生と結婚することは厳禁すべし、と厳かにヂットリヒ氏に告げしを以て、当時同氏は、偕も頑屈なる校長かなと思ひし如き色ありしも、流石教育ある人物なれば、謹んで村岡校長の命令に従ひ、爾後全く岩原子の事を断念して専心教授に従事し居る由。以上の如き事実なれば、現時同校に於て彼の記事の如き醜怪の事実なきは明かなることにして、村岡氏は益々校規を厳正にして、淑良なる生徒を養成することに熱心し居らるゝという。

〔読売新聞〕雑報 明25・8・30

以上が記事のすべてである。

これら新聞記事と「金色夜叉」の叙述を比較すると、新聞の方は、独逸人の音楽教師と校長の求愛の相手が別人であるに對して、「金色夜叉」では、両者がともに宮に求愛することになつてゐる点が大きな違いであるが、差異よりも一致点・類似点を多く見出しうるのであり、「金色夜叉」の叙述は、宮の心理を除いて、すべてこの記事に負つてゐると言つてよいであらう。最初の記事では、独逸人が慰みに女生徒に手を出したとしてゐるところを、あとで真面目な求婚であつたと訂正してゐるが、「金色夜叉」も「仇なる恋にはあらで、女夫の契を望み」と叙してゐるあたり、紅葉は、一連のこの三つの記事のすべてを読んでゐたと考えられる。

明治二十二年十二月に、紅葉は読売新聞に入社して、以後ほとんどの作品を読売に掲載しており、前掲の記事は、「後篇三人妻」の連載中であつた。紅葉は、まさにこの読売新聞の雑報を採り入れているのである。

こうした内容の記事が紅葉にとって関心をそそるものであつたろうことは、紅葉の作品の傾向からもうかがえるが、習作期の「風流京人形」(明21—22)で、紅葉は、すでに教師と女生徒の恋愛を描いていたのである。しかし、風俗と文辞の新鮮のみをとりどころとする以外は、人情本的な古めかしい筋だてが目立ち、しかも、当の女生徒が実

は瘋癲であつたというのが落ちでは、「支離滅裂と曰はんより外なし」<sup>(6)</sup>と評されてもしかたのないものであつた。とにかくこの自作の趣向に相似た雑報の記事が、紅葉に印象づけられたことは間違いないところである。『唾玉集』所収の紅葉談話「小説家の経験」の中で、紅葉は、自分の小説の方法について、

不図ヒントを得て、之れをかいて見たいと思ふことを大略かき留めて置いて、新聞から催促がくると、其の古い書きとめてある趣向を取つてかく。大概一年、二年、早いので半年前後たつたやつを担ぎ出して来て物にする。全く今得て今かくといふこともないではないが、大抵は斯うです。

と語っているが、『金色夜叉』の約五年前のこの新聞記事も、いつか小説に用いてみたいと思つて書きとめてあつた趣向の一つであつたに相違ない。同じく『唾玉集』中の談話で、紅葉は、『三人妻』のヒントも読売の雑報から得たことを述べており、『紅葉遺文』(明43)は、彼の小説趣向などのメモを整理収録しているが、その中には、小児の殺害遺棄事件の雑報記事を抜き出して書き添えをした「をんな心」という小文もある。それこれ考え合わせると、紅葉小説の素材は、当時の新聞記事、特に読売新聞などから具体的に幾らも指摘することできそうである。

それでは、叙上の素材は、作品において、どのような意

味を持っているであろうか。それについて、特に客観的な証拠があるわけではないが、一つの推測を試みたい。

「金色夜叉」が世に出る五年前の噂、そして読売新聞でいっそう評判になったこの恋愛事件は、人々にとってまったく忘れ去られていたであろうか。中には、「金色夜叉」のこの部分から、かつての噂の記事を思い起す者もいたのではあるまいか。そして、そのような読者にとっては、「金色夜叉」は、「風説鬼一口」の後日譚的な興味で読まれるところがあつたのではないかと想像する。それと示唆して読者の興味をそそるといふねらいも、新聞小説「金色夜叉」の一面には無かつたとは言えない。つまり、一種の当て込みの趣向であるが、「金色夜叉」には、さまざまな趣向の入り組んでいることが推測されるのである。

だが、この当て込みの趣向はごく裏面的なものであり、全体がかかる趣向で成り立っているわけではない。「金色夜叉」上中下篇合評(『芸文』明35・8)で、紅葉は、

金色夜叉を書くに就いては、今一つの動機がある。それは何だといふと、僕は明治の婦人を書いて見たいと思つたのだ。官は即ちこの明治式の婦人の権化である。

と、いささか正面きつた述べ方をしてるのであるが、この新聞記事も、やはり右の言葉とからませて、明治女性の設定に演じているその役割を考へることに、より意味があるろう。

明治という時代との相関のもとに、紅葉が、この素材をいかに扱っているか、そしてそれは、作品にどのような意義を与えているかという問題を、次の三点において眺めてみたい。

### (1) 風俗性

内田魯庵は、『おもひ出す人々』所収の「四十年前」(大正十四年三月記)の中で、次のように回想している。

女学校は高砂社を副業とした。教師が媒酌人となるは勿論、教師自ら生徒を娶る事すら不思議がられず、理想の細君の選択に女学校の教師となるものもあつた。

魯庵は、条約改正前の欧化的な風俗の一端としてあげているのだが、国粹的な反動の風潮の中でも、こうした傾向は容易に消滅したわけではないであろうし、事実、このような記事が非難がましい調子であらわれているわけで、外人との結婚や教師生徒の恋愛は、明治風俗の新傾向の典型として採り入れられていることは間違いないまい。

論はそれだが、この素材によって、「金色夜叉」の作品の時点が、幾分固定されるのではないかと考えるので、その点にも触れておきたい。

周知のように、「金色夜叉」には、時点の明確な社会的な事件の類が現われて来ない。漠然たるところで高利貸の横行を考え、また前編で貫一が高等中学生であるところから、その時点が、高等中学の設置期間である明治十九年から二十七年までに

落ちこむとして、大体二十六・七年あたりを前編の時点として考えるのが一般であると思われる。ところで、前編の時点における宮の年令は十九歳<sup>(7)</sup>なので、その二年前の十七歳の事件を明治二十五年のモデルとなった事件と相通して考えると、前編の時点は明治二十七年となるわけである。結果は通念の妥当性を保証したことになるが、一言つけ加えておく。

### (2) 断絶している青春

例えば「旧思想に養はれ、新智識を有せるお宮<sup>(8)</sup>」というヒロインの紹介がある。しかしヒロインの解説として、この表現は、多分に問題を含んでいるように思われる。一般に、宮の生いたちを述べる際に、やはり「明治音楽院」の出身であることが説かれるであろうが、時代の先端をゆく西洋音楽を学んだ人物というこの基礎的な設定は、作品全体を通じて、どのような意義を担っているであろうか。

風俗としての近代もさることながら、宮にとって、近代を精神性において体得する唯一の機会も、この音楽学校においてであったことが想定されるのであるが、作品においては、この充足した快活なべき時間が、後の憂悶と自省の時点でも何ら回想されるところもなく、一回的に放置されているのである。筋の展開に則した有機的な構造に組み入れられてはいないのである。ぐずぐずしながら親の意志にも引きずられ、結婚後は無表情な女として生き、変りはてた恋人に再会して情欲的に悶えるヒロインの過去に、この

ような近代を典型的に生きた体験があったとは、ほとんど想像することさえ困難であろう。明確に言えば、彼女の青春は、その後の生活に、何らの影をも落としてはいない。無自覚のままに悶える封建的な明治の女の暗愚な生に対して、彼女自身の過去は、他人の生のごとく断絶して、不自然に華麗である。そして、このような際だった不自然な印象は、新聞記事の採り入れを、内的に関連するところのない趣向的な風俗模様の貼り継ぎとする批評にも連なるであろう。しかしながら、宮の像が、そうした形のままで真实性を有して読者に受け入れられていた事実を看過することはできない。宮の像は、この断絶の姿においてこそ「明治式の婦人の権化」たりえていると考えられるからである。つまり、学校教育は彼女の表面を素通りしただけであり、彼女の本質は徴動だにせず、その後の生において剝き出しになっている。「金色夜叉」には、彼女がヴァイオリンを手にとるところさえ描かれていないのである。

そして、このような青春と、青春とは無関連なその後の人生という断絶の相こそ、明治の女性のほとんどの現実であつたろう。いかにも不自然に見える宮像の基礎的な設定が、不自然ゆえに真实性を確保しているという逆説に、「金色夜叉」の皮肉な近代性と、明治の悲劇性が存するのではあるまいか。新聞記事は、宮像の形成に重要な効果をもたらしていると言わねばならない。

### (3) 愛の不在

そもそもが小新聞の雑報にすぎず、いたずらに低俗な好奇心をあおって好色沙汰以上には眺められていない小事件ではあるが、その中にも、われわれは、きわめて深刻な近代の問題を豊富に見出すことができるであろう。そして、新聞が顧慮することもなかった無名の女子学生岩原愛子の心を通して、作家が、その愛の姿を批判的に消化し再構成する時に、はじめてオーソドックスな近代小説のヒロインが誕生するのである。紅葉は、モデルの心理をいかに解釈し、いかに再構成しているであろうか。二人の男の求愛によって宮の内面に生まれたのは、「可羞<sup>はづかしさ</sup>」とより有利な結婚への「希望<sup>のぞみ</sup>」であった。封建的な環境によって押しつぶされたと見える悲恋は、紅葉によって、ヒロイン自身による愛の無視という形をとり、意図的な改変が加えられている。愛の無視は苦悩の拒否であり、愛を愛として受け入れぬところには、近代的自我の覚醒は期待できない。「金色夜叉上中下篇合評」で、鷗外は、次のようにヒロインを批評している。

宮が性質は、畜に富その物を慕ふといふばかりではなくって、「自ら其の色よきを知」つて、其色を資本として、出来る丈の栄華を贏<sup>か</sup>ち得やうとして居る、その思想の全体が高利貸的だ。私が金色夜叉を以て、全世界の現時代思想を、或る方面から代表して居るとするのは、此高利貸的思想に在る。



鷗外は、世界思潮史的な観点から「金色夜叉」を位置づけているが、私見によれば、この高利貸的思想は、宮の場合、近世的封建的な処世観の延長においてマンモス化し露骨化した、ゆがんだ近代の思念である。それは、意識化し対象化して摂取される主義思想とはほど遠く、日常化して意識の低流にある根強い処世本能とも言うべきものとなっているのである。ともあれ、前近代的な思念による愛の不在を、意識的に設定した紅葉に、軽々しく彼の無思想を指摘することはできない。資本主義体制の確立に狂奔して疎外の時代を完成しつつあった時点において、宮像は、民衆の思念を典型化しているのであり、「金色夜叉」は、かかる前近代的明治をとらえて、再び逆説的に近代を提示していると言える。新聞記事は、単なる趣向ではなく、計算された近代的虚構によって消化されているのである。

以上、「金色夜叉」のモデルが「集合写真的」に採り入れられているという水蔭のことばの具体例を一つ示し、「金色夜叉」の方法を考えつつ、その形象化の意味について、舌足らずながら附言を試みたのである。

# 〔注〕

- (1) 『近代名作中人物事典』（「解釈と鑑賞」昭37・7）中の「鳴沢宮」（岡保生執筆）の項。なおモデルについては、同書および『近代名作モデル事典』（「解釈と鑑賞」

昭34・3臨時増刊）の解説が要をえている。

- (2) 『川上眉山・巖谷小波集』（『明治文学全集20』昭43、筑摩書房）

- (3) 阿部喜三男『小波日記』フィルム（『明治大学教養論集』38号、昭42・1）

- (4) 山本健吉『嵐が丘』と『金色夜叉』（『文学界』昭37・5）、木村毅『バーサ・クレーと明治文学』（『島田謹二教授還暦記念論文集・比較文学比較文化』昭36、弘文堂）、岡保生『金色夜叉』構想の原拠（『同氏著『尾崎紅葉の生涯と文学』昭43、明治書院）、安田保雄『「あひぎき」の改訳と『金色夜叉』』（『同氏著『比較文学論考』昭44学友社）、伊狩章『夏小袖』の構成と『金色夜叉』（『国語と国文学』昭44・7）等の論考が関連する。

- (5) 土佐亨『金色夜叉』の相貌（『国語と国文学』昭44・12）

- (6) 不知菴主人『紅葉山人の『風流京人形』』（『女学雑誌』百五十七号、明22・4・13）

- (7) 前編では明らかになっていないが、続編（第三章）に、「十九にして恋人を棄てにし宮」とあって、前編の時点の宮の年令がわかる。

- (8) 『金色夜叉』上中下篇合評（『芸文』明35・8）中の松廼舎の評

〔附記〕資料調査には、東大明治新聞雑誌文庫の御好意を得た。末尾ながらお礼申しあげたい。